

植村研一 著

高次脳機能がよくわかる—脳のしくみとそのみかた

片山容一（日本大学名誉教授、湘南医療大学副学長）

著者の植村研一氏は、いうまでもなく著名な脳神経外科医である。しかも、神経科学の諸分野にも幅広い見識を持つ碩学である。私のようなふつうの脳神経外科医からすれば、稀有の存在であるといっている。それゆえに、臨床医としてのあり方にも独特の重みがある。そのことが多くの臨床医を魅了してきた。

本書は、著者の大学での講義を基にしたものである。そう聞くと、誰しも教科書のような書物を想像するのではなかろうか。しかし、本書には、そうした書物にありがちな味気のない語句の羅列はない。医学生や若手の臨床医が目を輝かせて著者の講義に聴き入る姿を思い浮かべてしまう。

脳は、何百億個もの神経細胞が相互に情報をやりとりするネットワークである。だから、そう簡単に脳のみかたを説明することはできない。しかし、著者は、臨床の現場での研鑽を重ねた末に、脳のみかたについての極意に到達したのだと思う。本書は、それを語ったものだと言えるのではないだろうか。

その極意とは、書物からの知識を蓄積しただけのものではない。患者と執刀医という関係を突きつけられて、理屈抜きに感じ取った確信でもある。だから、本書は、臨床の現場にいる者には驚くほどわかりやすい。

著者は、大脳を「知、情、意」を司る3つの領域に区分し、それぞれの機能を「統合、感情、表出」として説明する。こうした説明の仕方は、字面だけを見ると珍しくないように思う。しかし、少し注意して読むと、目から鱗が落ちるというのはこのことかと感嘆させられる。

生命は、生きようとする意志を持つがゆえに、環境の変化を刺激として、絶えず身体に反応を起こす。ところが、進化とともに身体各部が分業するに至って、それぞれが勝手な反応を起こされては困ることになった。身体全体として、生きるために最適な反応を構成しなければならない。脳はそのために発達し、ついには高次脳機能と呼ばれる脳のしくみまでも獲得した。

脳は、身体各部での刺激と反応を検出しつつ、それを同一の身体に生じた出来事としてまとめあげる。そのために必要なこととは何か。一つは、「ただ一つの身体」に起きたこととして感覚を「統合」することである。あるいは、「ただ一つの身体」に起きたこととして端的な情動や「感情」を持つことである。さらにまた、「ただ一つの身体」が起こすものとして行動の「表出」を制御することでもある。

本書は、いろいろな道具立てをして、読者自らがこうした脳のしくみの本質に気づくように、それとなく導いていく。それによって、いつの間にか脳のみかたを修得させてくれる。

本書には、著者の海外でのエピソードなども随所に紹介されている。そのときの様子をひとつひとつ想像しながら読み進むと、著者がどのようにして研鑽を重ねてきたのかわかるような気がする。本書が一人でも多くの医学生や若手の臨床医の目に触れ、著者の拓いた道を先へ先へと延ばす人々が増えてほしいと思う。

（A5判 頁136 2017年 定価2,800円＋税[ISBN978-4-260-03195-0] 医学書院刊）